

岡山市立中央図書館

企画展示

明治時代の岡山の彫刻師 丸山三造

会期 令和2年4月7日（火）～5月17日（日）

月曜休館（ただし5月4日は開館）

会場 岡山市立中央図書館 2階視聴覚ホール前展示コーナー

岡山市で明治時代後半を中心に、さまざまな分野の印刷物で木版の彫刻師として活躍した野田屋町の丸山三造に焦点をあて、当館の所蔵品を展示します。

あわせて同時代の他の彫刻師にも触れ、当時の印刷業の様子を紹介します。

(1) 岡山の彫刻師 丸山三造

明治時代後半を中心に、岡山で発行された印刷物のいくつかに、木版の彫刻師として野田屋町の丸山三造の名前が記されています。いまは活版印刷も少なくなりオフセット印刷が主流ですが、明治時代はまだ精妙な浮世絵の版下を制作した江戸時代の彫刻技術が広く継承されており、多くの印刷物では木版で版下が製作されていました。

近世から近代にかけての日本の印刷業の中心は、出版が盛んで読者層が厚い京都・大坂～大阪・江戸～東京の三都市で、彫刻師の仕事についても、精妙な挿絵を彫り抜くことができる卓越した技術はこれらの主要都市が圧倒していました。

しかしその中で、岡山にあっても地図や名所案内図、書物、引札（ひきふだ）といった広い分野で精彩を放つ作品を残した彫刻師として、市内野田屋町（現在の北区野田屋町）の丸山三造の名前を忘れないようにしたいものです。

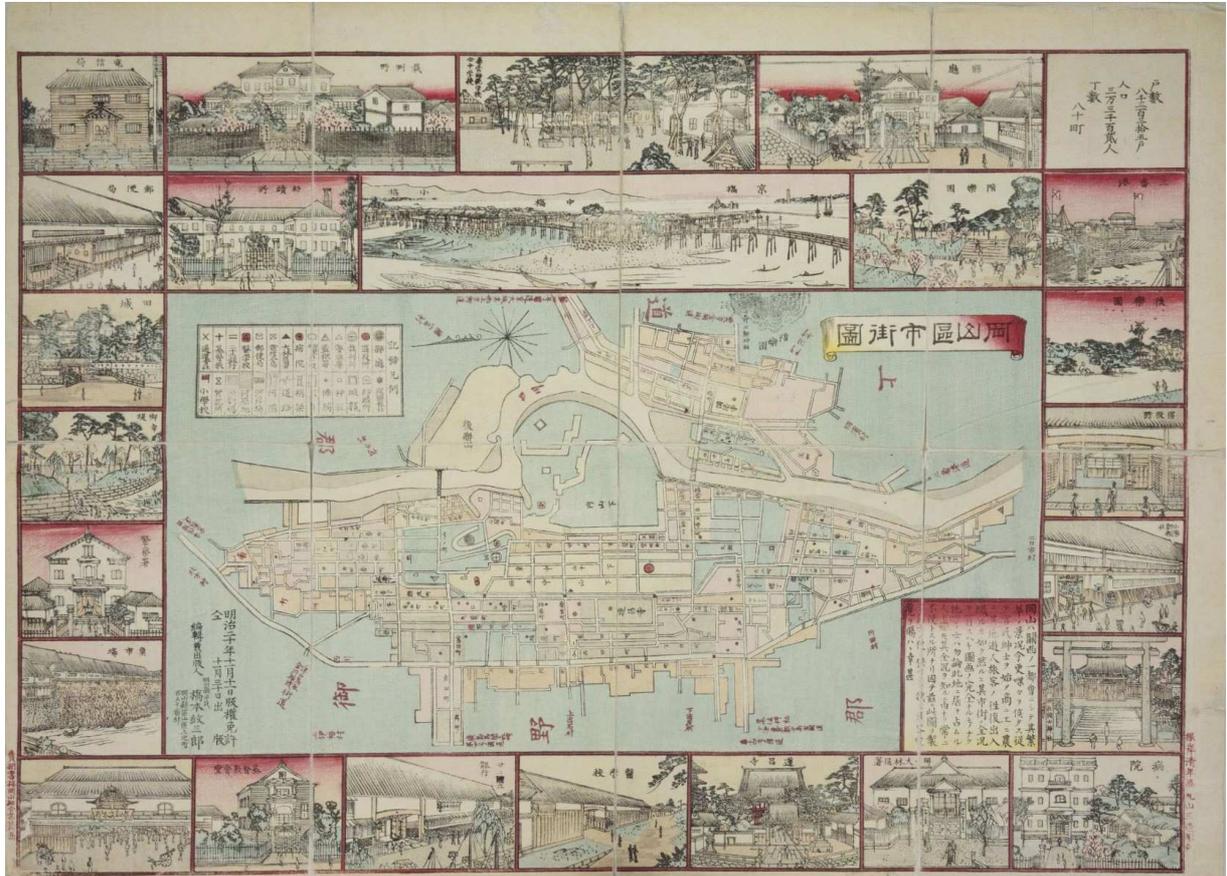
彼が版下を彫った大画面の作品は、明治 20 年の「岡山区市街図」と、明治 27 年の「岡山後樂園真図」が当館に所蔵されています。また彼は、学校の教科書『小学岡山県誌』の挿絵も担当しています。

彼は生没年も名前の正確な読み方も不詳ですが、岡山の人物事典『名士片々録』（大正 15 年発行）に掲載されようとして見送られた形跡があることから、その直前まで存命であったようです。彼が明治維新の頃の出生なら 75 歳頃で没したことになり、先述の作品は 20 歳代のもの。85 歳頃まで存命だったのなら幕末には生まれていて、それらは 30 歳代のものということになります。

「岡山区市街図」 (明治 20 年)

原画： 根岸清年

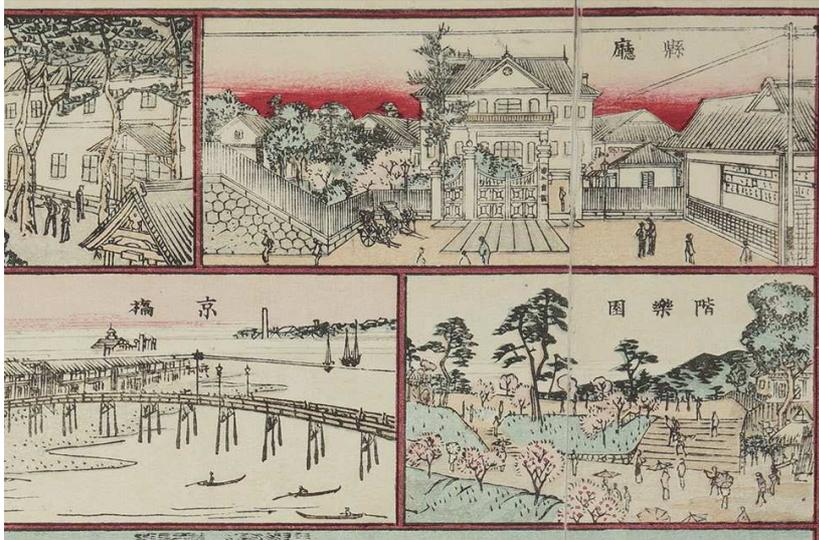
彫刻： 丸山三造



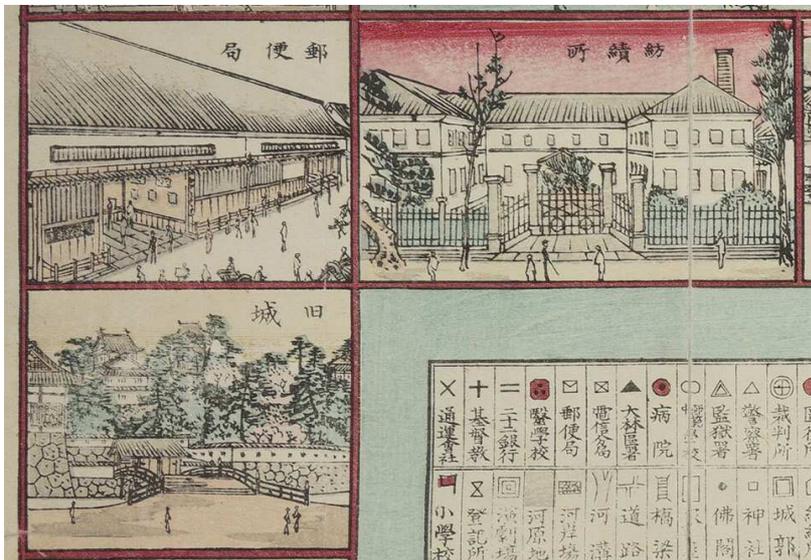
「岡山区」とは、明治 22 年に市制が施行されるより前の行政制度です。この図の中心に表されている岡山の市街は、いくつかの小区に色分けされています。これを囲んで周囲に小さな枠が並び、その中に県庁、区役所、郵便局、病院、後樂園、京橋などの岡山の名所や施設が描かれています。

どれも当時の岡山のまちの風景をしのぶのに貴重な画像ですが、岡山の彫刻師の中でも、とくに丸山三造が大都市の職人に劣らない高い技量をもっていたことがうかがえる作品です。

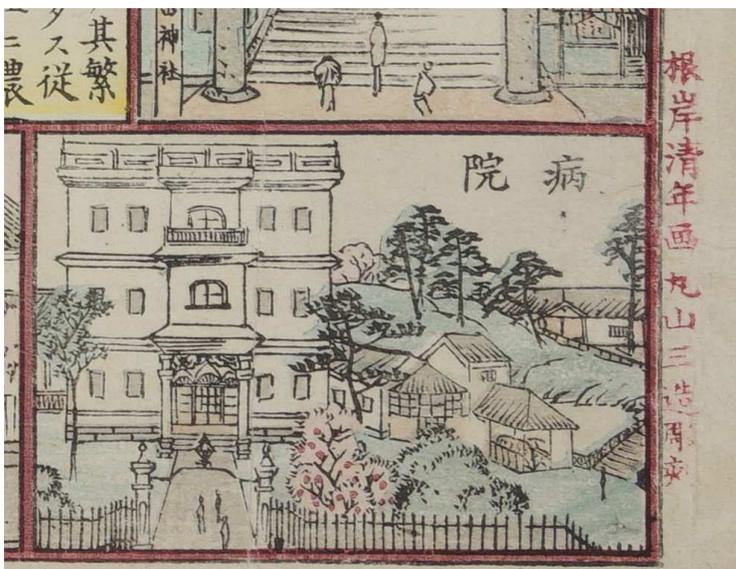
原画を描いた根岸清年については、まだよくわかっていません。



「岡山区市街図」の部分



「岡山区市街図」の部分



「岡山区市街図」右下隅の刊記

「岡山後楽園真図」 (明治 22 年)

著作： 木畑道夫
原画： 岡本常彦
彫刻： 丸山三造



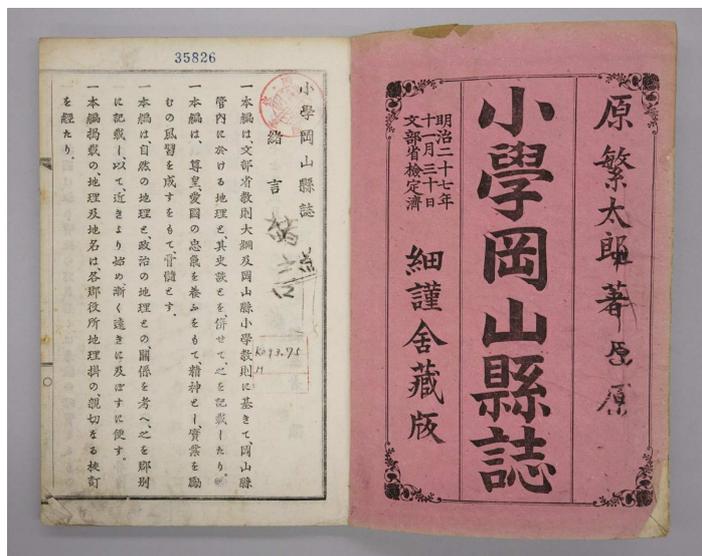
岡山藩の藩医の家に生まれた木畑道夫（1824～1904 年）は、岡山城や後楽園を文化遺産として保存することを訴え、藩政期の文書記録の整理と研究に取り組んだ、明治時代の岡山を代表する歴史研究者として知られています。

この図は木畑道夫が後楽園を解説し、岡本豊彦（幕末に京都で活躍した日本画家）の甥で、後半生を岡山で過ごした日本画家の岡本常彦が原画を描き、丸山三造が木版の版下を彫って作成されています。

明治 22 年の後楽園の様子を具体的に詳しく知ることができる資料です。

『小学岡山県誌』（明治27年）

著作： 原繁太郎
彫刻： 丸山三造
発行： 岡山市 北村長太郎（細謹舎）

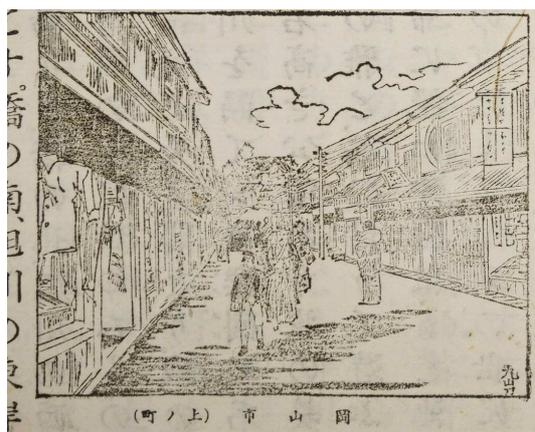


丸山三造は、岡山の小学校で広く用いられた岡山県の地誌の教科書の挿絵も担当しています。この本は岡山市の原繁太郎が執筆し、市内で書店と出版を営んでいた細謹舎から発行されました。

丸山三造は、岡山城、後樂園、吉井川鉄橋、上之町の街並み、池田光

政の肖像、児島湾の高島へ上陸した神武天皇などの図に、子どもたちが郷土の地理や歴史に興味を持つように彫刻刀を振るっています。それぞれの挿絵に「丸山刀」と署名があります。

当館では同じ本を複数所蔵しており、それぞれ別のページを開けて展示しました。



岡山市（上之町）



児島湾内の高島に上陸した神武天皇

(2) 岡山の引札と丸山三造

限られた得意先との取引が濃密であった昔の商習慣では、支払いはその都度の現金払いではなく、普段は帳簿へつけて盆と暮れにまとめて集金するのが普通で、店の手代が掛け取りにまわるとき、末永い愛顧を願って盆には団扇（うちわ）を、暮れには引札（ひきふだ）を配って挨拶したものでした。したがって引札は広告チラシと異なり、もらった人が愛着をもって保存し、家に飾ってもらえるように、印刷の技術を尽くした美しい図柄が描かれたり、新年の暦をあしらったりしています。

引札の贈答は明治 20～30 年代が最盛期でしたが、その頃は高い技術を誇った大阪の古島印刷所と中井印刷所が全国を席捲し、引札の図柄の部分はこの 2 社と関連会社の独占状態でした。その引札は一部に空白を残し、そこへ地方の彫刻師が木版の一色で商店の名入れ（業種、名前、住所の刷り入れ）をして、配ろうとしている商店へ渡されました。

岡山でも引札に 3 名の彫刻師（丸山三造、吉田栄治郎、八木柳蔵）の名前が残っていますが、それらは上記の大阪の印刷会社の製品に名入れだけをした場合がほとんどです。

しかし当館所蔵の「金物商ならびに砂糖、岡山市森下町、新屋」（明治 40 年）には丸山三造が「印刷兼発行人」として刊記を入れており、彼は名入れをするだけでなく、全体をプロデュースする場合もあったことがわかります。

また、丸山三造が自分の店のものとして配った引札「萬（よろず）摺物調進所 彫刻師 丸山三造」も、その技量からすれば、おそらく彼自身の製作になるものでしょう。

引札「内外砂糖卸売所 岡山市橋本町 小野定吉」

印刷・発行： 大阪市平野区 藤井為倫
商店名入れ： 岡山市船着町 吉田栄治郎

この引札の原画は、明治時代に京阪神地方の浮世絵師の第一人者とみなされるほど高い評判を得ていた二代目長谷川貞信が描いています。



部分図では、引札の欄外の刊記に、図柄を描いた大阪の印刷会社の社主の名前が細く印刷され、商店の名入れをした岡山の彫刻師の名前が朱で押印されています

引札「^{ならび}金物商并に砂糖 岡山市森下町 新屋」 (明治 40 年)

印刷兼発行人： 岡山市野田屋町 丸山三造



恵比寿の部分



引札の下端にある丸山三造の刊記

この引札は、新年の暦に恵比寿・大黒の図を添えたデザインで、下端に丸山三造が「印刷兼発行人」として刊記を入れているので、彼が全体を製作したことがわかります。

新年を迎えるにあたって得意先へ暦を贈る習慣は、現代においてもカレンダーの配布となって連綿と続いています。

引札「^{よろず}萬摺物調進所 岡山市野田屋町 彫刻師 丸山三造」

印刷・発行： 記載なし

商店名入れ： 記載なし



部分図

丸山三造が自分の店の紹介で配ったこの引札は、彼の技量からすれば、商店名の名入れだけではなく、自身で製作した可能性をみてもよいかも知れません。優美な菊の図柄が表されていますが、大阪の印刷所のもの比べると、やや描写が平板な感じがします。

業種に「御年玉ちらし (=引札)」、「御色入り団扇」、「御名刺」を掲げていますが、この文言の箇所は少し窮屈なので、あとから変更して加えたのかもしれませんが。うちわと引札は、それぞれ盆と暮れの配りものです。

引札「丁字香 岡山市紙屋町 くこ油本舗 桔梗屋」

印刷・発行： 記載なし

商店名入れ： 岡山市野田屋町 丸山三造



めでたい松に初日を添えたこの引札は、右欄外に「岡山市野田屋町 団扇商 丸山三造」の朱印が押されています。丁字香は江戸時代から続いていた岡山名産の鬢付け香油で、京橋西詰めにあった木屋が有名ですが、この引札は紙屋町（現、北区表町）にあった桔梗屋のものです。

引札「諸紙商 岡山市橋本町 三好辰造」

印刷・発行： 記載なし

商店名入れ： 岡山市野田屋町 丸山三造



この引札の原画を描いたのは幕末～明治初期に活躍した浮世絵師、月岡芳年^{よしとし}の孫弟子で、明治時代に京阪地方で活躍した広瀬楓齋^{ふうさい}です。人物の描き方が闊達で躍動感がある楓齋の引札は、全国で人気を博していました。左の欄外に、商店の名入れをした彫刻師を示す「岡山市野田屋町 団扇摺物商 丸山号商店」の朱印があります。

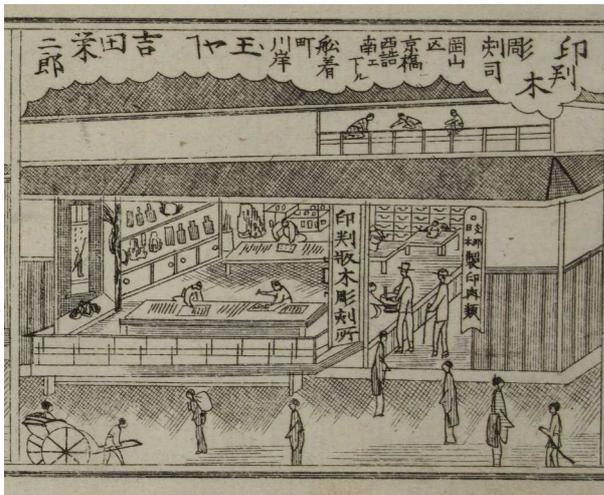
(3) 岡山のその他の彫刻師

丸山三造のほかに、資料で名前がわかっている2人の岡山の彫刻師を紹介しましょう。

吉田栄治郎は、旭川のそばの船着町（現、北区京橋町、京橋南町）で営業していましたが、丸山三造と並んで多くの引札に商店の名入れを行っています。

吉田栄治郎の店の様子は、堺市の川崎源太郎が編集発行した岡山市内の商店の案内書『山陽吉備之魁』（明治16年）に描かれています。これは携帯にも便利そうなポケットサイズの小さな本ですが、細密な銅版画で、客と店員が店先で商談する様子と、多勢の弟子や職人を抱えていたのでしょうか、その奥で複数の彫刻師が作業をする様子が描かれています。そして棚にはさまざまな製品が並び、床の間に画軸が掛けられています。

店の看板には「印判版木彫刻所」と記されているので、彼は紙の印刷物よりも印判の彫刻を得意としていたようで、さらに印肉も取扱っていたようです。



「山陽吉備之魁」に掲載された吉田栄治郎の店

さんよう き び の さきがけ
『山陽吉備之魁』（明治16年）

編集発行： 大阪府堺市 川崎源太郎



扉のページの題字

引札「内外砂糖卸売所 岡山市橋本町 小野定吉」 (明治30年)

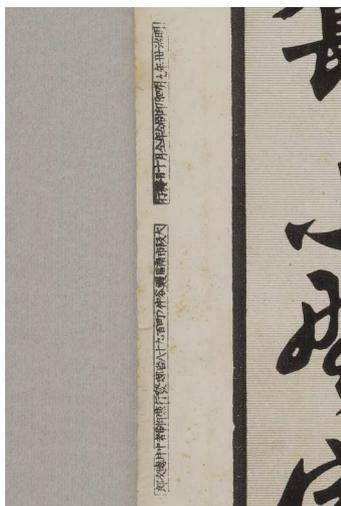
印刷・発行： 大阪市南区鰻谷町 中井徳次郎

商店名入れ： 岡山市船着町 吉田栄治郎

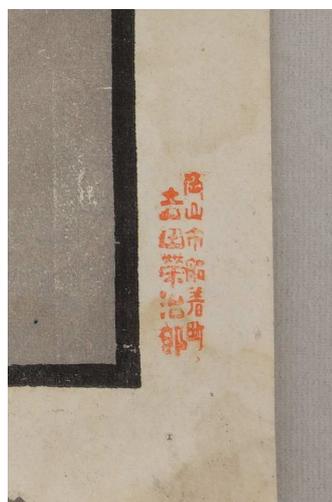


この引札の中に描かれている色紙型には「毎度御引立てを蒙り有難く謝し奉り候、当本年も相変わらず倍旧御愛顧の程、希い上げ奉り候」と書かれていますが、これこそが各地の商店が暮れに得意先へ引札を配った目的を表しています。これは色調といいレイアウトといい、品格ある整ったデザインの、大阪の中井印刷所による引札です。

岡山の砂糖卸商、小野定吉の引札は、吉田栄治郎がずっと名入れをしています。



左端の中井印刷所の刊記



右下の吉田栄治郎の朱印

引札「染手拭卸商 岡山新西大寺町 国富嘉三郎」 (明治17年)

銅刻： 大阪 河井春栄堂
出版： 大阪東区久宝寺町 京極榎吉
商店名入れ： 吉田栄治郎



右下の欄外に押された吉田栄治郎の黒印

これは実例が比較的少ない、銅版画をもとにした引札です。原画の銅版画を石版（オフセット印刷）に写して量産しています。右の欄外の黒印「岡山区船着町吉田版」から、吉田栄治郎が商店の名入れをしたことがわかります。

いっぽう八木柳蔵は、岡山藩士の子孫で士族ですが、はじめは小橋の西詰めの中島町（現、北区東中島町）に店を構えており、やがて当初は支店であった中ノ町（現、北区表町）へ移っています。彼が名入れをした引札が、当館には1点だけ所蔵されています。

さきほどの『山陽吉備之魁』には、「印判彫刻所」として彼の店の広告も出ています。



左端が八木柳蔵の広告（「山陽吉備之魁」から）

引札「茶 和洋烟艸 并 玩弄物大販売所
たばこならびに

岡山市車町通り 西中山下 馬場商店」

印刷・発行： 記載なし

商店名入れ： 岡山市大字中之町、八木柳蔵



椿のような堅木を輪切りにした木口（こぐち）の板を版下にすると、緻密な木版ができます。タバコとおもちゃを扱っていた店の、この引札の驚くほど細密な恵比寿と大黒の図は、木口木版で作った葉書大の別の版木を嵌め込んだもののようにみえます。そうだとすれば、木口木版には卓越した技術が必要なので、左の欄外に印刷人として押印している八木柳蔵は、引札の図の全体を作ったのではなく、商店名の名入れを受け持っただけとみるべきでしょう。

というのも、八木柳蔵が全体を作成したことが刊記からわかる引札も、丸山三造の「新屋」のそれのように暦を全体にデザインしたものが岡山県立記録資料館に所蔵されているのですが、それをみるとこの引札の緻密な作風とは異なり、八木柳蔵の作風は、もっと素朴でおおらかな味わいのものであるからです。



左下の八木柳蔵の黒印は商店名の名入れを示す？



木口木版の可能性も考えられる恵比寿の細密な描写

引札「^{びんつけろうそく}鬢附蠟燭商 岡山市紙屋町 元桔梗屋事^{こと} 森清三郎」

印刷・発行： 大阪市東区博労町 中井徳次郎

(明治 30 年)

商店名入れ： 岡山市野田野町 丸山三造



引札「砂糖卸売所 岡山市橋本町 小野定吉」 (明治 30 年)

印刷・発行： 大阪市東区博労町 中井徳次郎

商店名入れ： 岡山市船着町 吉田栄治郎



最後に、大阪市の中井印刷所による、飛翔する麒麟をデザインした同じ図柄の引札が 2 点あるので並べてみました。岡山市では、同じ図柄の引札に、橋本町の砂糖商・小野定吉と、紙屋町の鬢付香油商・桔梗屋こと森清三郎が、それぞれずっと懇意にしていた彫刻師、丸山三造と吉田栄治郎に商店名の名入れをしてもらっています。